

四十代の半ば頃、不意に、子供時代のある記憶がよみがえった。祖母と「潮干狩り」に行った思い出だ。手を引かれながら、砂浜を歩いた素足の感触。おもちゃの熊手でサクサクと砂を掘った手ごたえ……。思い出すと、街の雑踏の中においても、するはずのない潮の匂いを感じる気がした。

「あゝ、潮干狩りしたい」

矢も盾もたまらなくなり、春の大潮のある日、ついに金物屋で熊手を買い込み、バケツをぶら下げて三浦半島の海へ出かけた。

## Taste of the Season vol.16

text by Noriko Morishita  
illustration by Mizue Hirano

# 春の磯にて

エッセイスト 森下典子

その日、持ち帰ったアサリをバットに入れて、海水をひたひたと注ぎ、一晩台所の流しに置いて砂を吐かせた。真夜中にそっと足音を忍ばせ台所に行くと、カチャ、カチャッと、微かな物音がする。見ると、バットの中のアサリたちが、半開きの貝の隙間から足や管を長々と伸ばしていて、世間話でもしているみたいに、時々、ピュッと潮を吹く。彼らも生きてるんだな……と、思った。

翌日、アサリを流水でこすり洗いし、箆に上げた。フライパンでオーリーブオイルを熱して、みじん切りのニンニクを炒め、香りが立ったところで、アサ

ちようど干潮の時刻だった。遠浅の干潟のぬかるみで、手に手に熊手を持った家族連れが、腰をかがめて砂を掻いている。私も、浜へ駆けおりた。甘じよっぱい海藻の匂いのする風に髪をなぶられながら、靴を脱ぎ捨て、ズボンを膝までまくり上げた。

裸足になった瞬間、足の指がこそばゆさにキュッと縮んだ。が、陽ざしで温まった干潟に足首まで沈むと、突然足裏から地面に、何かがスーッと抜け出した気がした。私は思わず目を閉じ、快感に耐えた。まるで、電気製品に溜まった電気が、「アース」を通して地面に逃げて行ったような感覚だった。

潮が満ちてくるまでのひととき、私は干潟にしゃがみこみ、背中にぼかぼかと陽を浴びながら、ただ黙々と砂を掻いた。掘った穴に手を突っ込み、指先に固いものが触ると掴み出した。砂まみれの貝を、海水ですすいで、ゴロゴロとバケツに入れる。聞こえるのは遠い潮騒と、頭上を飛び交うカモメの鳴き声だけ。時々立ち上がって腰を伸ばし、キラキラ光る彼方の海に目をやると、全身にシャンパンの泡のようにワァーッと歓喜がわきあがって、(何もいらぬ……)と、心から思った。

リを殻ごと、ゴロゴロとフライパンに入れ、白ワインを注ぎ、蓋をした。火が通ったところで、蓋を開けると、台所に濃厚な磯の匂いが広がって、パツパツと口を開いた貝の中に、オレンジ色の身のぞいでいる。浅葱をパラパラ散らして「アサリのワイン蒸し」の出来上がりである。

春の磯を堪能するのに、これほどシンプルな方法はない。砂出しも完璧で、アサリの身がぷりぷりしている。それ以上に、殻の窪みにたまった汁は、海のエキスの味がする。食べ終わった貝殻を小鉢に入れると、あつという間に「貝塚」ができあがった。

もりした のりこ／神奈川県生まれ。横浜市在住。日本女子大学文学部国文学科卒。『週刊朝日』の名物コラム「デキコトロジー」のライターを経て、エッセイストとなる。主な作品に、『日は好日』『猫といっしょにいるだけで』（新潮文庫）、『いいいたべもの』（文春文庫）など。近著に『好日日記―季節のように生きる』（バルコ出版）、『こいいいたべもの』（文春文庫）がある。